キルヒャーとオベリスク

伊藤博明

1. オベリスクの発見

アタナシウス・キルヒャー（Athanasius Kircher, 1602-1680）は、1628年に司祭に叙されて、ドイツ南部、ライン川沿いの帝国都市シュパイアーにおいて修練期間の第３段階に入った。彼は没後に刊行された『自伝』（*Vita*）において、当地のイエズス会の学院（1567年に設立、1688年に破壊）の図書館で発見したある書物について次のように述懐している。

> 1628年、私は神学の学修を終了して司祭に叙され、イエズス会の慣例により、修練期間の第３期を果たすために、シュパイアーに送られた。そこで私は、あらゆる勉学を控えて、神的な事柄の観照にひたすらわが身を捧げ、宗教人としての完成に至るために必要な事柄だけに没頭した。
>
> この時期に、私に、学院の図書館の中である書物 —— 何かは覚えていない —— を探すという務めが与えられた。そこで、私が書物を一冊ずつ調べていると、偶然か神の摂理の配剤によって、私は、教皇シクストゥス５世によってローマに建てられた、ヒエログリフの形象が刻まれた、あらゆるオベリスクを表示している書物に遭遇した。私はすぐに好奇心を抱き、それらがいかなる種類の形象なのかを検討した。
>
> 私は［最初］、それらが彫刻家によって気ままな空想にもとに置かれたものと考えたが、しかし、そこに添えられたオベリスクの歴史から、これらの形象が、ローマに建っているオベリスクに太古の時代に刻まれた、古代エジプトの遺産であることを知った。しかし、それらの完全な意味については、はるか以前から、誰も説明することができなかった。そこで、不思議な欲求に促されて、私の中に、その意味を —— もし達成可能ならば —— 明らかにしようという強い願望が芽生えた[1]。

この図書館での発見が、キルヒャーの後年の、オベリスク、ヒエログリフ、そしてエジプト学全般への関心と業績へと発展していくのであるが、ここで彼が見いだした書物とは何だったのだろうか。キルヒャーによれば、それは「教皇シクストゥス５世によってローマに建てられた、ヒエログリフの形象が刻まれた、あらゆるオベリスクを表示している書物」（librum, in quo omnes Obelisci Romani a Sixto V. Pont. Max. in Urbe erecti Hieroglyphicis figuris expressis exhibebantur）であり、しかも、それにはオベリスクの歴史が添えられていた（historia obeliscorum annexa）。

最初にオベリスクが、エジプトからはるばるローマに運ばれたのは、アウグストゥス帝（在位前27～後14）の時代に遡る。その後も歴代の皇帝によって次々に建立され、コピーを含むと40以上のオベリスクが帝都に存在したと伝えられる[2]。しかし、中世の間にそれらのあるものは地上に放置され、またあるものは地中に埋まってしまい、16世紀の初頭においては唯一、ヴァティカンの敷地内にあるオベリスクだけが建っていた［**図１**］。それをシクストゥス５世（Sixtus V, 在位1585-1590）は、建築家のドメニコ・フォンターナ（Domenico Fontana, 1543-1607）に命じて、サン・ピエトロ広場に移設させた。その様子はドメニコ・フォンターナの『ヴァティカンのオベリスクの移動について』（*Della trasportatione dell'obelisco vaticano*）[3]に収められた銅版画によって知られている［**図２**］。

続いてシクストゥス５世は、チルコ・マッシモから二体の大きなオベリスクを掘りだして移動させ、それぞれをサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂とサンタ・マリア・デル・ポーポロ聖堂の前に建てさせた。さらには、サン・ロッコ広場のオベリスクをエスクィリアヌスの丘に移動させてサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂の前に建てさせた[4]。いずれのオベリスクにおいても、頂点には十字架を置くことによって、エジプトの異教的な雰囲気を払拭しようとしている。また、それぞれのオベリスクの底部には新しく銘文が刻まれた。ブライアン・カランが述べているように、それらは、「異教の偶像崇拝の対象からキリスト教（と教皇）の勝利の具現化への変容を宣言しているのである」[5]。現在のローマには、12体の古代エジプト起源のオベリスクが見いだされる。

さて、シクストゥス５世が在位中に（1593年）、ミケーレ・メルカーティ（Michele Mercati, 1541-1593）は、現教皇に献呈する、イタリア語による浩瀚な著作『ローマのオベリスクについて』（*De gli obelischi di Roma... alla sanitità di N.S. Sisto quinto pontefice massimo*）を刊行した[6]。メルカーティは教皇の侍医で、古物蒐集家であり、オベリスクについての助言者でもあった。彼は本書において、ローマに存在しているオベリスクについてその起源から詳しく解説しており、その点では、キルヒャーが『自伝』で言及していたような「オベリスクの歴史」を語っている。しかし、本書には図版がいっさい含まれておらず、「ヒエログリフの形象が刻まれた、あらゆるオベリスクを表示している書物」という表現には適合しない。

他方、幾人かの研究者は、キルヒャーがシュパイアーのイエズス会学院の図書館で発見した書物を、17世紀の初頭に刊行された、ヨーハン・ゲオルク・ヘルヴァルト・ヴァン・ホーヘンブルク（Johann Georg Herwart van Hohenburg, 1533-1622）の『ヒエログリフ宝典』（*Thesaurus Hieroglyphicorum*）と推測している[7]。本書には刊行年・刊行地が記されていないが、1610年頃にミュンヘンで刊行されたことで研究者の意見は一致している。ヘルヴァルト・ヴァン・ホーヘンブルクは、バイエルンの外交官であったが、同時に数学、文献学、考古学の分野で業績をあげた学者でもあった。本書は縦76センチ×32センチの25葉からなる図版集であり、上述したフォンターナの『ヴァティカンのオベリスクの移動について』、ヤン・ファン・ゴルプ（Jan van Gorp, 1518-1572）の、1580年にアントウェルペンで刊行された『ヒエログリフィカ』（*Hieroglyphica*）、そしてロレンツォ・ピニョーリア（Lorenzo Pignoria, 1571-1631）が1605年

にヴェネツィアで刊行した『エジプト人たちの聖なる象形文字が刻まれた最古の銅板の正確な記述的説明』（*Vetuistissimae tabulae aeneae sacris Aegyptiorum simulachris coelatate accurate explicatio descriptio*）に一部を拠りつつ、ベルギーの版画家ピーター・クッケ・ファン・アールスト（Pieter Coecke van Aalst, 1526-1613以降）によって作成したものである[8]。

この『ヒエログリフ宝典』の内容はタイトルとは幾分異なり、さまざまな対象の雑多な蒐集と言うべきものである。表紙には、唇に指を当てたハルポクラテスのイメージとコンパスが描かれている［**図 3**］。本書には19余りのオベリスクが描かれており、その表面に記されたヒエログリフは、多くは現実のオベリスクの表面から正確に模写されているが［**図 4**］、不正確なものも、そしてまったく新たに創案されたもの［**図 5**］も存在する。

その他に『ヒエログリフ宝典』には、ヒエログリフが刻まれた石棺、ディオクレティアヌス浴場近くのアックア・フェリーチェの噴水に置かれたライオン像、そして非エジプト起源のローマの石棺、護符、マグナ･マーテルを表す彫像、ミトラ教のレリーフなどが含まれている。その中でも注目すべきは、「イシスのテーブル」（Mensa Isaiaca）あるいは、最初の所有者であるピエトロ・ベンボ枢機卿（Pietro Bembo, 1470-1547）にちなんで「ベンボ板」（Tabula Bembiana）と呼ばれている、古代のブロンズ製の食卓の上板（縦75センチ）である［**図 6**］。それは1525年にローマで発見されて、すぐに貴重な古代の遺物として注目を浴び、古銭研究家のエネアス・ヴィーコ（Eneas Vico, 1523-1567）は1559年に銅版画で複製している。

「イシスのテーブル」では、中央の神殿の中にイシスのような女神が描かれ、数多くのエジプトの神々、神官、ファラオが配され、それらの周りにヒエログリフを伴っている。これらのヒエログリフは、形状的には古代エジプトのヒエログリフに近いが、しかし、何かの意味を成しているわけではない。『ヒエログリフ宝典』の複製画に添えられた説明では、世界の航海図を表していると述べられているが、推測の域を出るものではない。現在では、古代ローマにエジプトから運ばれた遺物をもとに、紀元後１世紀の後半にローマで制作されたと見なされている[9]。

ローマに移ってからのキルヒャーのエジプト研究は、もっぱらコプト語を対象にしたもので、それは1635年の『コプト語、すなわちエジプト語の先駆』（*Prodomus coptus sive Aegyptiacus*）、1643年（再版はアムステルダムで1671年）の『復元されたエジプト語』（*Lingua Aegyptiaca restituta*）、1647年の『エジプト、すなわちコプト教会の典礼』（*Rituale ecclesiae Aegypticae sive coptitarum*）に結実した。他方、オベリスクとヒエログリフ、そしてエジプトの歴史・宗教・哲学・文化についての膨大な研究は、その後に、1650年の『パンフィーリのオベリスク』（*Obeliscus Pamphilus*）、1652-54年の『エジプトのオイディプス』（*Oedipus Aegyptiacus*）全３巻、1666年の『エジプトのオベリスク』（*Obelicus Aegyptiacus*）、そして、1676年の『秘儀の導師スフィンクス』（*Sphinx mystagoga*）にまとめられる。

キルヒャーはこれらの著作において、『ヒエログリフ宝典』に基づいて、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂前のオベリスクや「イシスのテーブル」の複製を掲載している。また、1644年にキルヒャーは、ミュンヘンのヘルヴァルトの相続人に対して、『ヒエログリフ宝典』の銅版画を借りることを申し入れている（すでに利用されていて、これは実現しなかった）[10]。

こうしたことを考慮に入れると、キルヒャーが1628年にシュパイアーのイエズス会学院の図書館で、初めてオベリスクとヒエログリフに関心を抱いたのは、『ヒエログリフ宝典』を介してであったと考えてよいであろう。

2. ヘルメス、ヒエログリフ、オベリスク

オベリスクとは、ギリシア語で「焼串」を意味する「オベリコス」が語源であると言われており、エジプト語では「テケン」（防御）と呼ばれていた。太陽信仰の中心地であるヘリオポリス（下エジプト南部ナイル川東岸）の太陽神殿にあったベンベン石が祖型である。すでに古王国時代後期から小型のオベリスクが出現するが、新王国時代には、神殿の塔門の前に一対の巨大なオベリスクがしばしば建てられた。そこにはヒエログリフによって、ファラオの名前やその事績が刻まれた。それがローマに運ばれたのは、上述したようにアウグストゥス帝の時代である。

キルヒャーにとって、オベリスクは、「フェニキア人が ―― エウセビオスの証言によれば ―― タウトと、エジプト人がトートと、より正確にはフタトと、すなわち、神々の中の神（DEVM Deorum）と、ギリシア人がヘルメス・トリスメギストスと呼ぶ」[11]人物と結びつけられている。この「三重に偉大な」（トリスメギストス）という添え名を戴いた古代エジプトの智者とオベリスクの関係について、キルヒャーは、インノケンティウス10世（Innnocentius X, 在位1644-1655）がジャン・ロレンツォ・ベルニーニ（Gian Lorenzo Bernini, 1598-1680）に依頼してナヴォーナ広場に建てたオベリスクに関する『パンフィーリのオベリスク』において、次のように述べている。

古代のエジプトの地において、ヘルメス・トリスメギストスは２種類の文字を発明した。一方の文字は万人に共通で誰にでも理解されるものであったが、他方の文字は、秘儀的な教説を表すためのものであり、俗衆から護るために、神官、哲学者、預言者だけが理解しうるような文字、すなわちヒエログリフであった。そして彼は、このヒエログリフを記すための素材として、オベリスクを創案した。

> この人物が、かのトリスメギストスであるヘルメス、エジプト全体の知恵の源泉にして始原、ヒエログリフの文字の最初の制定者、オベリスクの発案者にして設立者（obeliscorum inventror et erector）であり、彼から、続く王たちと神官たちは、最も知恵あるヘルメスから伝授された教説を広めるように定められ、そして、石柱に、すなわちオベリスクに刻まれた教説を心に留めたのである[12]。

ヘルメス・トリスメギストスについて、キルヒャーの『エジプトのオイディプス』第３巻では次のように語られている。

エジプト人、ヘルメス・トリスメギストスは、ヒエログリフの最初の創始者として、まさに、エジプトのあらゆる神学と哲学の創始者にして父であり、エジプト人の間で、神的な事柄を正しく考察したすべての人々の中で最初の、最古の者だった。そして彼は ―― すでに先に、充分に示したように ―― 永遠に残るであろう石と岩の巨大な塊に（aeterunum duratiuris lapidibus et ingentibus saxorum）、これらの事柄についての自らの見解を刻印した。古代哲学の異邦の註釈者たちだけではなく、聖なる教父たちもまた、神と神的な事柄に関してオルペウス、ムサイオス、リノス、ピュタゴラス、プラトン、エウドクソス、パルメニデス、メリッソス、ホメロス、エウリピデス、そして他の称讃に値する人々が提示したあらゆるものが彼に拠っていることを証している。そして、トリスメギストスは、『ピマンデル』と『アスクレピウス』において、神が本質において一であり善であることを初めて確言した。彼の後に続く哲学者たちは、彼に従った[13]。

キルヒャーが、古代エジプトにおけるヘルメスの位置づけを始めとして、その地からギリシアのプラトンへと至る知的発展の把握において、マルシリオ・フィチーノ（Marsilio Ficino, 1433-1469）以来の「古代神学」（prisca theologia）の理念を受け継いでいることは明白である[14]。フィチーノがコジモ・デ・メディチ（Cosimo de'Medici, 1389-1464）の命によって、ヘルメス・トリスメギストスに帰されていた、ギリシア語の作品『ヘルメス選集』（*Corpus hermeticum*）をラテン語に訳したのは1463年のことだった。このラテン語訳は『ピマンデル、すなわち神の権能と知恵について』（*Pimander, seu De potestate et sapientia Dei*）と題されて1471年に刊行され、その後、ヨーロッパの知的世界におけるヘルメス主義の勃興を促すことになる。フィチーノは、この著作の冒頭に置いた「要旨」において次のように述べている。

モーセが生まれた時代に、自然学者プロメテウスの兄弟で老ヘルメスの母方の叔父である占星学者アトラスが活躍したが、この老ヘルメスの甥がヘルメス・トリスメギストスであった。［……］彼は、哲学者たちの間で初めて、自然的なものと数学的なものから神的なものの観照へと転じた。すなわち、彼が初めて神の威厳、ダイモンの位階、魂の変容について、叡知の限りを尽くして論じたのである。それゆえ、彼は神学の最初の創始者と呼ばれた。彼に従ったオルペウスは、「古代神学」の第二の地位を得た。アグラオパモスは、オルペウスの秘儀を伝授され、ピュタゴラスが神学においてアグラオパモスに続いた。そのピュタゴラスに従ったピロラオスが、われわれの神的なプラトンの教師なのである。こうして、６人の神学者から、ある驚くべき秩序によって、あらゆる点で調和している一つの「古代神学」という学派が形成されたが、それはヘルメスから始まり、神的なプラトンによって十全に完成させられたのである[15]。

フィチーノはプラトンの著作を全訳した、熱烈なプラトン主義者であると同時に、フィレンツェの聖堂参事会員を務めた敬虔なキリスト者であった。彼の思想的理想は、主著『プラトン

神学』（*Theologia platonica*）というタイトルが示唆しているように、プラトン主義的な哲学的伝統とキリスト教神学を統合することであった。その「序文」によれば、すべての哲学的営為は最終的に神へと向けられるものであって、神の崇敬から切り離されるものではなく、むしろその前提となるものである。そして、諸哲学の中でもとりわけキリスト教の信仰に導くものは「神的なプラトン」（divinus Plato）の哲学であって、「神の律法の唯一の権威に従うことのない多くの人々の誤った精神は、宗教を十全に支えるプラトン的理性によって落ち着く」[16]のである。

「古代神学」の系譜は、このフィチーノのシンクレティズム的理想を、歴史的に保証するものであった。キリスト教弁証論である『キリスト教について』（*De religione christiana*）によれば、古代の神学者たちもキリストの本性についてある知識を具えており、彼らはすべて「神の子」の誕生を信じていた。オルペウスは、それをユピテルの頭部から生まれるパラスと名づけた。プラトンはヘルメイアス宛の書簡で「父なる神の子」と、また『エピノミス』では「ロゴス」、すなわち「理性とことば」と呼んだ。ヘルメスは、何度も神の知恵について語りながら「神の子」と呼び、「霊」にも言及している。ゾロアスターおいても同様なことが見いだされる[17]。

フィチーノにおいて特徴的なことは、古代の各地で栄えた哲学的＝神学的伝統がすべてギリシアに入り、それがプラトンにおいて完成されたと考える点である。「ゾロアスター、メルクリウス、オルペウス、アグラオパモス、ピュタゴラスが一致している古代神学はすべて、われわれのプラトンの書物の中に含まれている」[18]。そして、この「神的なプラトン」の伝統を、新プラトン主義者たちとディオニュシオス・アレオパギテースを介しながら中世のキリスト教神学と接続しようとしたのである。

フィチーノと同じく、フィレンツェのプラトン・アカデミーの圏域で活躍したジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラ（Giovanni Pico della Mirandola, 1463-1494）は、さらに広範な哲学的＝宗教的総合を企てた。ピーコは、当時の一般的な人文主義者とは異なって、スコラ哲学を弾劾することもなく、またフィチーノとは異なって、アリストテレス主義を批判することもなく、その理想は「哲学的平和」（pax philosophica）と呼ばれていた。「古代神学」の理念もフィチーノから受け継いだが、ピーコが際だっているのは、「カバラ」という古代ユダヤ教の秘儀的伝統を称揚したことである。彼がローマで企てた討論会のための『900の提題』（*Conclusiones DCCCC*）の一つでは、カバラと古代の神学者との一致が示されている。すなわち、カバラ主義者が「メタトロン」と呼ぶものは、オルペウスの「パラス」、ゾロアスターの「父性的精神」、ヘルメスの「神の子」、さらにはピュタゴラスの「知恵」と同じものなのである[19]。

さて、キルヒャーの『エジプトのオイディプス』の第２巻は、２分冊で千ページ以上に及ぶ大冊であり、「ヒエログリフの学院、すなわち思索場」（Gymunasium, sive Phrontisterion Hieroglyphicum）というタイトルを有している。この巻は12のクラス（Classes）に分かたれ、「エジプト人の百科全書」（Encyclopedia Aegyptiorum）という表現のもとに、古代のヘブライ人、カルデア人、エジプト人、ギリシア人、他のオリエントの人々の「隠された知恵」（recondita

sapientia）が包含されている。キルヒャーは最初のクラスにおいて、エンブレムやインプレーサから寓話や格言までを含む象徴についての一般的な議論を行っており、次のクラスでは、言語の起源、発展、神秘的な力について論じるとともに、ヒエログリフの諸相（数学、医学、錬金術、魔術、神学）に言及している。

第３クラスは「秘儀伝授者スフィンクス」（Sphynx mystagoga）と題され、カルデア人、エジプト人、ヘブライ人、ギリシア人の「謎めいた文言」（effata aenigmatca）と、オルペウス、ホメロス、ピュタゴラス主義者、プラトン主義者によってつくられた「寓話の寓意的難題」（fabularum allegorici nodi）が採りあげられる[20]。具体的には、ゾロアスターの『カルデアの託宣』、オルペウスの『詩編』、ピュタゴラスの『黄金詩編』が詳細に説明され、プラトンの教説についてはプロクロスを援用して解説される。興味深いことには、ピーコ・デッラ・ミランドラの「秘儀的な文言」が幾つか採りあげられて言及されている[21]。続いて第４クラスは全体が「ヘブライ人のカバラ」（Cabala Hebraeorum）について、すなわち「古代のヘブライ人の寓意的な知恵」（De Allegorica Hebraeorum verum Sapientia）に充てられている[22]。

ヘルメス・トリスメギストスの教説についてキルヒャーは、自著のいたるところで引用しているが、『エジプトのオイディプス』の第12クラス「ヒエログリフ的神智学、形而上学、あるいは神学」（Theosophia Metaphysica, seu Theologia Hieroglyphica）でまとめて解説している[23]。その「序文」では、「われわれはエジプトの神学の秘密の頂点を、あらゆるヒエログリフ的学識の目的と目標を明らかにしよう」と述べ、ヘルメスの残した書物の内容について次のように述べている。

> ヤンブリコスが証人だが、ヘルメスは神的な事柄の観照に関係する数多くの書物を書き、それらをヒエログリフの文字で表した。それは秘かで隠された秘儀で満ちていたので、彼は哲学者という名だけなく、また予言者という名も得た。彼は、古代の宗教の滅亡を、信仰の始まりを、キリストの降誕を、未来の裁きを、世の再生を、祝福された者たちの栄光を、罪ある者たちの処罰を予言している。それゆえ、アウレリウス・アウグスティヌスは、彼が星辰の知識かダイモンの啓示によって多くのことを述べたのではないかと疑ったのである。しかし、ラクタンティウスは、彼をシビュラたちと預言者たちの間に数えあげることにおいて躊躇しなかったのである[24]。

この文章の中で、「彼は、古代の宗教の滅亡を……」から末尾までは、実は、フィチーノの『ピマンデル』への「要旨」からの文字通りの引用である[25]。たしかにキルヒャーは、カバラの受容を別にすれば、「古代神学」についてのフィチーノの理念と彼の説明に多くを負っている。しかし、二人の思想家の間は、ヘルメス・トリスメギストスとエジプト人の知恵の位置づけをめぐって、大きな差異が存在しているのも事実である。

フィチーノにとって重要なのは、神学と哲学がエジプトではヘルメスによって、カルデアではゾロアスターよって始められたこととともに、それがギリシアに伝えられて、オルペウスや

ピュタゴラスを経て、「神的なプラトン」によって完成されたことであった。いかにヘルメスやゾロアスターが卓越していた智者であったとしても、彼らの教説は、プラトン哲学の、いわば前史にしかすぎない。フィチーノにとって「古代神学」の理念は、究極的には、自らが唱える「プラトン神学」、すなわちプラトン主義的なキリスト教神学の理念に対する歴史的な証拠という位置に留まる。

他方、キルヒャーにとって、エジプトという土地と、ヘルメス・トリスメギストスの存在と、彼の案出したヒエログリフは、特別で絶対的なものであった。すべては秘儀的なヒエログリフ的学識から始まり、それが一方ではギリシアへと伝えられ（ピュタゴラス、プラトン等がエジプトを訪ねた）、他方では近東へ『カルデアの託宣』として伝えられ（その作者はゾロアスターとされているが、実際はヘルメスが著した）、そして、ヘブライ人、カルデア人、アラビア人の間で流布した。キルヒャーは、ヘルメスの説いた学識とそれを表したヒエログリフが世界史的に展開していく、一種の知の普遍史を構想したのである。

キルヒャーによれば、その教説は新プラトン主義者や初期キリスト教作家の中にも受け継がれて、プロティノス、ポルピュリオス、イアンブリコス、あるいはディオニュシオス・アレオパギタース、殉教者ユスティノス、オリゲネス、クレメンス、エウセビオス、エイレナイオスは、「古代人の書物の正確に考量して、エジプトの教説を、部分的ではあるが、明瞭に表している」[26]。この普遍史は現在にまで続いており、キルヒャーは自らの前に、長い期間の空隙を埋めた人物として、ピエリオ・ヴァレリアーノ（Pierio Valeriano, 1477-1558）、ニコラ・コッサン（Nicola Caussin, 1583-1651）、そしてロレンツォ・ピニョーラとヘルヴァルド・ヴァン・ホーヘンベルクの名を挙げている。後者の二人についてはすでに触れたが、ヴァレリアーノは考古学者・文学者で浩瀚な『ヒエログリフ集』（*Hieroglyphica*）を1556年にバーゼルで刊行している。またコッサンは、フランスのイエズス会士で、『エジプト人の象徴的知恵について』（*De symbolica Aegyptiorum sapientia*）を1623年にケルンで刊行した。

3. ルネサンスのヒエログリフ

ヒエログリフ（聖刻文字）は、古代のエジプトで紀元前3200年頃から使用された。元来は、人体、臓物、植物、天体、祭器、武器、道具、食物など具体的な形象を用いた、絵画的な象形文字（表意文字）であった。しかしすぐに表音文字の役割も得て、さらには「頭韻」の活用によって24個のアルファベットが定められた。さらに表意・表音文字の組み合わせにおいては、同音異義語を区別するために、しばしば「決定詞（限定詞）」が置かれた。ヒエログリフは墓碑、神殿、オベリスクに刻まれ、ファラオの事績、神々の参加、来世の書が記された。

ヒエログリフを楷書に例えるならば、行書にあたるのはヒエラティック（神官文字）であり、両者ともにエジプト古期・中期・後期にわたって使用された。前７世紀頃からさらに簡素化された、草書体とでも言うべきデモティック（民衆文字）が現れた。後３世紀頃からは、ギリシア語アルファベットを用いたコプト語が使われ始め、旧来のエジプト文字は急速に衰退してい

き、ヒエログリフも４世紀には消滅して、その読み方も忘れさられてしまった。ルネサンスにヒエログリフへの関心が高まったときも、もっぱら表意文字として見られていたために正しく読むことはできず、その解読を可能としたのは、1799年のナポレオンのエジプト遠征下におけるロゼッタ・ストーンの発見である[27]。

さて、ギリシア人は古代からエジプトに大きな関心を抱いており、少なからぬ人物がエジプトを訪れており、ときおりヒエログリフへの言及が見られる。ヘロドトス（Herodotus, 前484頃-428頃）は『歴史』（*Historiae*）において、エジプト人が用いている二種類の文字、すなわちヒエログリフとデモティックに言及しており、またこのエジプト文字がピラミッドに記載されていることを伝えているが、具体的な文字の形状については述べていない[28]。その後、前１世紀にシチリア出身のディオドロス・シケロス（Diodrus Siculus）は歴史書『図書館』（*Bibliotheca*）において、「神官だけが知りうる」ヒエログリフを具体的に説明している。それによると、エジプト人の言葉は、あらゆる種類の動物、人間の身体の部分、さらには道具類、とりわけ大工道具に似ている。ここで概念を表すのは音節の組み合わせではなく、模倣された事物に付与された象徴的な意味である。たとえば、鷹は「速く為しうるもの」を、鰐は「悪しきもの」を、眼は「正義の番人」にして「身体全体の保護者」を表すのである[29]。

他方、ローマの博物学者プリニウス（Plinius, 23-79）は、『博物誌』（Historia naturalis）において、エジプト人のオベリスクに言及して、そこに刻まれた文字について報告している。

> オベリスクは太陽の光線の象徴的な表現であり、エジプト語ではその意味に解されている。最初にそれを建てたのは、ヘリオポリス［太陽の都］を治めていたメスフレスで，彼は夢で勧告されていたのであった。このことはオベリスクに刻印されており、われわれが見る彫刻と象徴はエジプト人の文字である[30]。

エジプトからローマに移設されたオベリスクについて記しているのは、アンミアヌス・マルケヌス（Ammianus Marcenus, 330頃-400頃）の『歴史』（*Historiae*）である。彼によれば、皇帝コンスタンティヌス２世（Constantinus II, 在位337-361）は、357年にキルクス・マクシムス（マクシミリアヌス帝競技場）にオベリスクを建立した。その表面に刻まれている「ヒエログリフと呼ばれる形象の無数の印刻」は始源の知恵を所有している太古の権威をわれわれに示している。彼が意味を伝えているヒエログリフは、禿鷹による「自然」と蜜をつくる蜂による「王」である[31]。このオベリスクは、現在、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂の前に建っている。

ヒエログリフは哲学者たちの関心も惹き、たとえば新プラトン主義者のプロティノス（Protinus, 205-269頃）は、エジプト人における表音文字と象形文字を区別し、後者に哲学的な意義を付与している。彼は『エンネアデス』の中で、次のように述べている。エジプトの知者たちは、何かを知恵に基づいて示そうと欲したとき、命題の音声と発音を表記するような表音文字を用いないで、形姿を描いた。すなわち、神殿にひとつひとつの事物に対応する形姿を

刻印した。これは、英知界における非展開性を示している。つまり、そこでは、各々の形姿が一定の知識であり、知恵であり、事物そのものであって、思考ではなく熟慮でもないからである 。ここでプロティノスは、ヒエログリフが英知界に実在するイデア的観念を表現する「象形文字」であることを示唆している。このヒエログリフのもつ哲学的な象徴性こそが、のちにマルシリオ・フィチーノからキルヒャーまでの思想家たちを魅了することになる。

ルネサンスにおけるヒエログリフへの関心は、1419年年にフィレンツェ出身のクリストフォロ・ブオンデルモンティ（Cristoforo Buondelmonti）が、ギリシア語の作品『ヒエログリフ集』（*Hieroglyphica*）をギリシアのアンドロス島で発見したことから高まる[33]。人文主義者たちは古代の著作家たちによるヒエログリフへの言及を知っていたがゆえに、この著作は熱狂的に彼らに受け容れられた。『ヒエログリフ集』は二つの巻から成り、第１巻には70の、第２巻には119のヒエログリフが記載され、天界と自然界の諸事象、人間のさまざまな性格や行為を表現する文字記号がギリシア語で説明されている。その中にはエジプト起源のものも含まれているが、ヒエログリフに想を得て４世紀頃に編纂されたと現在では見なされている。一例を挙げるならば、「宇宙」をエジプト人は次のように表現している。

> 彼ら［エジプト人］は宇宙を表わそうと望んで、自らの尾を喰らい、多彩な鱗で覆われた蛇を描いた。鱗は宇宙の星辰を示している。他方で、蛇は大地のように最も重い生き物であり、水のように滑らかである。蛇は毎年、脱皮を繰り返し、一年の季節が順序正しく経めぐるように、若返る。しかし、蛇が自らの身体を食物として利用するということは、宇宙において神的摂理によって産みだされたものはすべて、再びそれへと減少していくことを示している[34]。

レオン・バッティスタ・アルベルティ（Leon Battista Alberti, 1407-1472）もまた、ヒエログリフに関心を抱いた人文主義者の一人であった。彼は1452年に刊行された『建築論』（*De re aedificatoria*）において、「古代の人々は、銅に鍍金を施した文字記号を大理石に嵌めこみ、エジプト人はこの徴を次のように用いている。すなわち、眼で神を、禿げ鷹で自然を、蜜蜂で王を、円環で時を、牛で平和を、また同様なものを意味させた」[35]と述べている。

エジプト人がこのように文字記号を用いた理由は、言葉はそれを話している個々の民族によってのみ理解され、普通の文字で記されたものは、いつかは忘却されるからである。このことは実際、エトルリア人の文字について起こった。彼らの遺跡において、彼らが彫ったと思われる文字が発見されてはいるが、誰もそれを判読することはできていない。しかし、エジプト人が用いた種類の記号は、威厳ある事柄に精通した者たちによって容易に理解できるのである。ギリシアの墓などでもこの方法を模倣されたが、他方、ローマ人は偉人の業績を、円柱や凱旋門やポルティコ（屋根つきの玄関）に物語風の彫刻で表現したのである。

実際にローマには、ヒエログリフが刻まれた遺物が残されていた。たとえば、81年に完成したウェスパシアヌス帝の神殿の遺物［**図７**］、204年にローマに建造されたアルジェンターリの

アーチ、そして、サン・ロレンツォ・フオーリ・レ・ムーラ聖堂に残存していたローマ時代の神殿のフリーズ［図８］である。これらには図案化された事物が描かれ、共通するものも多かった。たとえば、ブクラニウム（牛頭模様）、水盤、斜めの水差し、糸巻き、タンスなどである。それらがいかなる意味を有するかについては知られていなかったが（実際には装飾的な機能しか与えられていなかったと思われる）、当時は、アルベルティが述べているような、古代のヒエログリフと見なされていた。

1449年にヴェネツィアで、このような装飾物を古代風のヒエログリフとして利用して、後代に大きな影響を及ぼすことになる小説、フランチェスコ・コロンナ（Francesco Colonna, 1433-1527）の『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』（*Hypnerotomachia Poliphili*）が刊行された[36]。タイトルはギリシア語をもとにした造語であり、「ポリーフィロの眠りにおける愛の闘い」というほどの意味である。夢の中で、主人公のポリーフィロが恋するポリーアを求めてさまよい、最後に結ばれるという物語である、その途中において、ポリーフィロは古代風の神殿や庭園に迷いこみ、神話上の怪物やニンフや神々に出会う。

小説においてはエジプトへの関心も高く、あるとき、彼は驚愕すべき障壁、すなわち、高いオベリスクを戴いた大きなピラミッドの前にいる［図９］。またあるときは、オベリスクを背負った巨大な象を見いだす［図10］。それは黒曜石よりも黒い岩石から造られており、石の中には金と銀がちりばめられている。オベリスクの表面には、エジプト文字（charactere aegyptio）が美しく彫られ、その先端には輝く透明の球体が載っている。巨像の方は固い班岩から制作された見事な台座の上に据えられており、白く輝く石の大きな牙をもっている。背中の青銅製のサドルからは美しい装飾物が胴体の両側に垂らされており、そこにはラテン語で「脳は頭の中にある」と書かれている[37]。そしてまた、巨像の頭部から鼻先にかけて真鍮製の優雅な装飾物が懸けられている［図11］。その中には、「ギリシア語とアラビア語」（littere ionice et arabe）を見ることができる。ポリーフィロはその意味について本文では述べていないが、挿絵から判断する限り、「労苦と勤勉」と読みとれる[38]。

そして、巨象の台座にはヒエログリフが刻まれており［図12］、ポリーフィロはこれらのきわめて古く、神聖な文字について熟考し、その意味を次のように解釈した。

> 汝は労働を自然の神に惜しみなく捧げよ。汝が少しずつ［汝の］魂を神に従わせるようにするならば、［神は］汝の生をしっかりと護り、慈悲深く支配して保持し、安全に庇護するだろう（EX LABORE DEO NATVRAE SACRFICA LIBERALITER, PAVLATIM REDVCES ANIMVM DEO SVBIECTVM. FIRMAM CVSTODIAM VITAE TVAE MISEICORITER GVBERNANDO TENEBIT, INCOLVMENQVE SERVABIT）[39]。

ポリーフィロは個々のヒエログリフについて意味を明示して説明しているわけではないが、カルヴェージに従って、以下のように解釈したと考えられるだろう。二つの鍬を伴ったブクラニウム（牛頭模様）＝労働。神を表す目と自然を表す禿鷹が記された祭壇＝自然の神に犠牲を

捧げること。水盤＝気前のよさ。水差し＝漸次さ。糸巻き＝導くこと。蓋をされた古代の壺＝魂。神を表す目が記された靴底＝神に従うこと。鷲鳥と結ばれた錨＝確固とした庇護。手でつかまれたランプ＝汝の生。オリーブの枝を伴った舵＝慈悲深く支配すること。二つの鉤＝保持すること。海豚とリボンで結ばれた、蓋を閉ざされた箪笥＝無傷のままに保持すること[40]。

『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』には、他にもヒエログリフに関する記述が、挿絵入りで幾つも見いだされ、16世紀の芸術文化に大きな影響を及ぼした。デジデリウス・エラスムス（Desiderius Erasmus, 1466-1536）は、「海豚が巻きつけられた錨」というヒエログリフを、「ゆっくり急げ」(Festina lente) という格言とともに採りあげ[41]、フランソワ・ラブレー (François Rabelais, 1494-1453）も、ポリフィル（Polyphile）の『愛の夢』（*Songe d'Amours*）に触れて、錨と海豚のイメージを示唆している[42]。

4. ヒエログリフの「理念的な読み」

ホラポッロの『ヒエログリフ集』が数種類のラテン語訳および俗語訳で流布していく中で、ヒエログリフの百科事典というべき大著が1556年にバーゼルで刊行された。キルヒャーもその名を挙げていたピエリオ・ヴァレリアーノの『ヒエログリフ集、すなわちエジプト人と他の民族の聖なる文字についての注解』（*Hieroglyphica seu de sacris aegyptiorum, aliarumque gentium literis commentarii*）である[43]。

ヴァレリアーノは、この著作においてホラポッロはもとより、ギリシア・ローマの古典文学を渉猟して広く素材を集め、その解釈にあたってはキリスト教的な道徳が重要な役割を演じている。彼自身1537年頃に聖職者となっており、『ヒエログリフ集』のコジモ１世への献呈文においては、聖書とヒエログリフの類似に言及している。彼は『詩篇』（78・２）から「私は口を開いて喩えを語り、いにしえからの謎を語ろう」を引き、続いて、「救世主が言おうとしたのはまさに次のことの他ならない。すなわち『私はヒエログリフ風に語り、古代の記憶を寓意的に述べよう』」と付言している。

この『ヒエログリフ集』から例を一つ、「人生の条件」(Humanae vitae conditio）と題されたヒエログリフを紹介したい［**図13**］。これは、プルタルコス（Pultarchus, 46頃-120頃）の『イシスとオシリスについて』（*De Iside et Osiride*）で紹介されていたものである。プルタルコスによれば、サイスのアテナ（＝イシス）神殿の浮彫りには、五つのヒエログリフが見られ、それらは「おお、生まれ出ずる者よ、世を去り行く者よ、神は厚顔無恥を憎みたもう」ことを象徴的に意味している[44]。というのは、子どもは誕生を、老人は死を象徴し、そして鷹は神を、魚は憎悪を、河馬は破廉恥を表すからである。ヴァレリアーノはここで新たな解釈を試み、次にように読みとっている。「われわれは生まれる。われわれは老いる。われわれは生きる。われわれは死ぬ。自然の不和[45]」。

彼の解説によれば、子どもの頭部は「誕生」を、男性の頭部は「老齢」を表し、全体としては「人間の一生は速く過ぎさる」ことを意味している。鷹は「神」「愛」、そして「それらを伴

う人生」を意味し、魚は、海が危険であることから、「憎悪」や「死」を表す。最後の河馬は「厚顔無恥の暴行」を意味するが、ここでは「矛盾」を表している。というのは、河馬は二つの異なる自然（河と陸）に生き、二つに割れた蹄をもっているからである。

このような象徴的意味の読解の可能性を最大限に追求したのがアタナシウス・キルヒャーであり、この点においても範としたのはマルシリオ・フィチーノであった。フィチーノは、古代のギリシアの文字に関して『ピマンデル』の「要旨」において、ヘルメスは「文字記号を動物や樹木の形象として定めた」[46]と述べている。また彼が『プラトンの「ピレボス」注解』（*Commentaria in Philebum Platonis*）で述べているところによれば、文字の様式はさまざまな人々によって発明された。ゾロアスターは、神官が自らの文書を俗衆から遠ざけておくために、星辰と諸天の記号によって文字を定めた。他方ヘルメスは、ゾロアスターに範を得て、俗衆が神学を汚さないように、「動物や樹木の形象によって」文字を定めたのである[47]。こうしてヘルメスは、いわば秘密の文字の発明者とされるのであるが、この発明の理由については、プロティノス『エンネアデス』へのフィチーノの、先に紹介した、謎めいた言明への注解から明らかになる。

> エジプトの神官は、神的な秘儀を表示するために、文字記号ではなく植物や樹木や動物の形象を用いた。というのは、神は事物の知識を、事物についての多重の思考としてではなく、事物の単純で確固とした形相として所有しているからである。君は「時」のことを、「速やかに過ぎ去る」、「回転運動によって始めと終わりを結合する」、「賢慮を教える」、「物事をもたらし運び去る」などと表現する。このとき、君の思考は多重的かつ可動的である。他方エジプト人は、「尾をくわえた、翼をもつ蛇」を描くことによって、上述した表現の内容をすべて確固とした形象によって把握することができたのである。ホルスが記述している、他の形象についても同様である[48]。

ここでフィチーノが言及している「ホルス」とは、ホルス・アポッロ、すなわちホラポッロのことである。ヘルメスがエジプト人に伝えた「動物や樹木の形象」とは、フィチーノにとって、ホラポッロが解説したヒエログリフである。こうしてフィチーノは、『ヒエログリフ集』の権威を、最古の神学者＝哲学者ヘルメス・トリスメギストスに帰すとともに、象形文字としてのヒエログリフを寓意あるいは象徴と見なし、俗衆には近づくことのできない秘儀的言語と考えた。ただし、彼がオベリスクに刻まれたヒエログリフの読解に熱心だったわけではない。上述したように、フィチーノにとって最重要だったのは、ヘルメスの知恵を完成させたプラトンの哲学だったからである。

キルヒャーにとってもヒエログリフは、ある概念をさまざまな事物によって表現する、たんなる絵文字ではなかった。プロティノスの言葉を敷衍するように、ヒエログリフは通常の言語体系とはまったく異なるシステムであることを、キルヒャーは強調する[49]。『エジプトのオイディプス』の「ヒエログリフは正確には何を表すのか」と題された箇所で、次のように言われ

ている。

> ヒエログリフ、すなわち「聖なる刻字」（sacra sculptura）は、聖なる事柄の象徴に他ならず、朽ちることのないように石や固い岩に刻まれる。それをエジプト人は言論や、動詞と名詞の組み合わせによってではなく、自然と神性の最高の秘儀の十全な意味を含む表徴と形象（symboae et figurae）によって形成するのが常であった[50]。

キルヒャーにとって、いわば既存の言語のシステムを模範として、ヒエログリフの一つ一つの意味を同定し、それを連結することによって、全体の意味を獲得しようとする、フランチェスコ・コロンナやヴァレリアーノの方法は否定される。むしろ、フィチーノが述べたように、ヒエログリフのもつ「多重性や可動性」を捉えることによって、そこに内在する秘儀的教説を明らかにしなければならない。エジプトのヒエログリフをラテン語で表現するために、この困難な方法を、キルヒャーは「理念的な読み」（lectio idealis）と呼んでいる。パンフィーリのオベリスク上に刻まれたヒエログリフの解釈について、まず彼はこのように述べている。

> このヒエログリフの文字は、アルファベットの文字において行われるような仕方で、すなわち、われわれが音節と語を用いて産みだすような仕方で行われるとは誰も想像してはならない。そうではなく、この文字は象徴的なものであり、理念的な概念に属しているがゆえに、それはまた、理念的な読み（lectio idealis）を通して示される必要がある。イアンブリコスを引用すれば、「言葉は脇に置いて、意味を受け取りなさい[51]」。

この「読み」の具体例を、パンフィーリのオベリスクの南面のヒエログリフ［**図14**］に則して検討してみたい。このオベリスクは、ローマにおいてドミティアヌス帝（Domitianus, 在位 81-96）によって建造されたもので、元来はローマのイシス神殿に付随していたモニュメントであった[52]。上部の台形の部分はピラミディオン（四角錐）と呼ばれている部分であり、何も記されていない場合も多いが、ここでは純粋にイコン的な表象が現れている。上部では、円盤に2枚の翼と2匹のウラエウスコブラ（聖なる蛇）が描かれて、絶対的な権力を示唆し、下方では、エジプト神を擬したドミティアヌス帝がオシリス神とトート神から挨拶を受けている[53]。

オベリスクの本体では、一番上にハヤブサとウラエウスコブラが囲む太陽が刻まれ、「太陽神ホルス」を意味している。その下のヒエログリフは、オラツィオ・マルッキの解釈によるならば、「マアト［創造の際の宇宙の秩序］に愛される、力強い雄牛」を表している[54]。つまり、全体では「太陽神ホルス、マアトに愛される力強い雄牛」となるわけである。ところが、キルヒャーはピラミディオンから始めて、長大な「理念的な読み」を提出している。以下、冒頭と最後の部分について引用する。

> 三様態の神性（triforme numen）であるヘンフェタ —— 第一の精神、万物の動者、第二の

精神、創造者、すべてをつくる精神 —— 永遠の、三位一体の（triunus）、始めも終わりもない神へ……。ここに寛大なアピスあるいはセラピス、エジプトの豊饒な神霊があり、上方から受けた力を、四重の影響によって、ナイルの神霊、エジプトの善ダイモンを介して南に属する万物へと分配し、そこから人類に必要なものすべての多産と豊饒が流れでて、それを通して、最終的に、人類の幸福が得られる[55]。

一見したところ、このようなキルヒャーの「理念的な読み」は途方もない、空想的なものと感じられるかもしれない。彼はその点を考慮して、この解釈の下部に、「読者の方々は、先立つページと、個々のヒエログラム［図版上では四つに区切られた単位］において、このようにすべてが説明される理由を知るでしょう」と付言している。

その説明の冒頭を紹介すると、ピラミディオンの第一のヒエログラムにおいて、蛇がぶらさがり、翼がついた円盤は、神の象徴であり、エジプトの賢者たちはそれを、三位一体の神性としての三様態の神性として理解したのである。彼はコプト語の知識を援用しながらい、エジプト人は至高の神を「ヘンフェタ」、すなわち「最大の神」と呼ぶ、と述べている。続いて、「第一の精神、万物の動者」については、キルヒャーは多くの古代の証言を引きながら説明している。それは、神の永遠で、無限で、純粋で、単純な本質を表し、「トリスメギストスは、あるときは父と、あるときは第一の精神と、あるときは至上の知性と呼んでいる」[56]。そしてヘルメスの神についての、「中心がどこにでもあり、円周がどこにもない」知性的な円、という有名な定義を引いている[57]。

このようにキルヒャーの説明を読み進めていくと、彼の「理念的な読み」は、たんに直感的な、あるいは神秘的な「読み」ではけっしてないことが理解されるだろう。実際、それは、途方もない学識を具えた人物の、「トリスメギストス」（三重に偉大な）と添え名を冠することも可能な、一人のイエズス会士の学的探究の極北に位置しているのである。

5. オベリスクと象

ベルニーニに命じてナヴォーナ広場の四大河の噴水にオベリスクを建立した、謹厳なイノケンティウス10世の後を襲ったのは、シエナの名家キージ家出身のアレクサンデル７世（Alexander VII, 在位1566-1577）である。本人自身が蒐集家、学者、詩人であった新教皇に対してローマの文学者や芸術家の期待は大きかったが、実際、彼はその期待を裏切ることはなかった。

教皇庁立の大学「ラ・サピエンツァ」は拡張され、そこには壮麗な図書館が付設された。ヴァティカン宮の図書館には、アレクサンデル７世の書籍と写本が収められて「キージ文庫」を構成し、地方の図書館の蔵書もヴァティカン図書館に統合され、同時に、文書館も整備された。芸術家の庇護者としては、建築家のジャン・ロレンツォ・ベルニーニを登用し、彼はサン・ピエトロ広場のコロネード、ヴァティカン宮の「スカーラ・レギア」、サンタ・ポーポロ聖堂の造

営などに関わった。ヴァティカン大聖堂に置かれた教皇の墓もベルニーニの手によるものである。

芸術家たちだけではなく学者たちも厚く庇護され、アタナシウス・キルヒャーも、アレクサンデル７世の12年間の治世の間、彼の恩恵に与った。教皇はイエズス会を庇護する立場から、キルヒャーに絶大な信頼を置き、自らがヒエログリフに関心を抱いていたことも理由で、彼のエジプト研究を促進するとともに書物の出版を援助した。

さて、1665年にサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂に隣接するドミニコ会修道院の敷地の地中から、小さなオベリスク（高さ5.5メートル）が発見された。この聖堂はパンテオンの背部に位置し、その名称から推察されるように、古代ローマ時代にはその一帯は、ミネルヴァの神殿、イシスの神殿、セラピスの神殿が置かれていた。現在の聖堂は、ローマでは珍しいゴシックの代表的建造物で、1370年に奉献されている。

このオベリスクは、元来は、エジプト第26王朝第４代の王、ハイアブラー（在位、前589-570）がデルタ地帯のサイスに、前588年から569年の間に建てたものである。この王は『エレミヤ書』ではホフラと、ギリシア語ではアプリエス、あるいはウアフレス（マネトンによる）と呼ばれている。ローマには、ディオクレティアヌス帝によって、284年から305年の間に、おそらく二本一組で移入され、イシス神殿の前に置かれた。

このオベリスクの発見はローマ中に喧伝され、アレクサンデル７世も強い関心を抱いた。彼は即座に、エジプト学の専門家としてのキルヒャーを指名し、オベリスクの発掘を指揮させるとともに、その再建作を考案するように彼に求めた。新しく設置される場所は、ドミニコ会修道院と聖堂の前の、サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ広場に決定された[58]。

このオベリスクをいかなる台座の上に設置するかについては、内部でさまざまな議論がなされたようであり、現在キージ図書館には幾つかの、異なった素描が保存されている。その最初のものは、おそらくドメニコ会の建築家、ジュゼッペ・パッリア（Giuseppe Paglia）が作成したものである［**図15**］。オベリスクは積み重なった岩石の上に建てられており、台座の四方には一本の骨を咥えた犬が置かれている[59]。これらの犬は、「主の番犬」（Dimini canes）としてのドミニコ会への言及となっている。他にも、二匹の犬が二人のプットーに置き換えられた素描も存在しているが[60]、いずれも採用するには至らなかった。

そして、台座の作成の仕事はベルニーニに任されることになった。彼の作成した素描も幾つかのヴァージョンが残されている。最初のものでは、文字が記された立方体の上に二人の寓意的人物像が座っており、いわばオベリスクを肩の上に支えている[61]。その頂点には星と十字架が置かれている。次の素描は、二人の男性がかがみ込みながら両手でオベリスクを抱えている[62]。また別の素描群では、台座の上で、おそらくヘラクレスが斜めになったオベリスクを抱え上げているもの[63]［**図16**］と、岩石の上のオベリスクを両手で支えているものがある[64]。

最終的には、現在のように、象の上にオベリスクを載せたモニュメントとなるのであるが、その理由は知られていない。いずれにせよ、決定にあたっては教皇自身、キルヒャー、ベルニーニの間で議論されたと想像される[65]。興味深いことに、オベリスクと象との組み合わせに

ついては、すでにベルニーニが30年以上も前に考案していた。

1630年頃、ウルバヌス８世（Urbanus VIII, 在位1623-1644）の時代に、現在はモンテ・ピンチョの庭園に建っているオベリスクが、市壁の外側のキルクス・ウァリアヌスの遺構から発見された。教皇の甥であるフランチェスコ・ベルベリーニ枢機卿は、ヴィア・クワットロ・フォンターネにある自邸、パラッツォ・バルベリーニの庭園にこれを建立しようとした。その際にベルニーニは、一つは素描によって[66]［**図17**］、一つはモデルによって[67]［**図18**］象の上に立つオベリスクを創案した。明らかに、これらがサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ広場のオベリスク像の祖型である。

このアイデアの典拠については、すでに18世紀の中葉に、ローマの古物愛好家で考古学者のフランチェスコ・デ・フィコローニ（Francesco de' Ficoroni, 1664-1747年）が、先に触れた、フランチェスコ・コロンナの『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』における一枚の挿図［**図10**］であることを指摘している。フィコローニは1744年にローマで刊行した、一種のローマ案内である『近代ローマの名所』（*Le singolarita di Roma*）においてこう語っている。

> サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァの偉大な教会は、かつてここにあった、この神に捧げられた神殿からそのように呼ばれるが、ドメニコ会によって管理されている。その広場の中には、オベリスクを戴いた巨像が立っており、この彫像は、とくに稀書である「ポリーフィロの夢」（I sogni di Polifilo）から採られ、ベルニーニの創案によって制作されたものである[68]。

このフィコローニの指摘は、その後の研究者が等しく認めている。たしかに、コロンナの著作における木版画とベルニーニの作品の細部がすべて一致しているわけではないが、ベルニーニが自らの創案において示唆を得たことは明らかである。加えて、『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』は、アレクサンデル７世も親しんでいた作品であり、彼の所有していた1499年のアルドゥス版は、現在もヴァティカン図書館に所蔵されている。そこには教皇自身の手による多くの書き込みが見られ、たとえば、巨象の頭部から鼻先に懸けられた、真鍮製の装飾物に記された「労苦と勤勉」（ΓΟΝΣ ΚΑΙ ΕΥΦΙΑ）というモットーには、「この形象は像の頭部にあった」と文字が加えられている[69]。

こうして、ベルニーニによって四壇から成る基底と立方体の台座を含めて最終的なプランが完成した［**図19**］（完成作では、像の顔の向きだけが変更されている）。実際の制作は彼の弟子のエルコレ・フェッラータ（Ercole Ferrata, 1610-1686）が担当し、1666年４月28日に着工して、1667年２月３日にこのモニュメントは、銘記を除いて完成した。その後、銘記は台座の二つの部分に刻まれ、公的な建立式は６月11日に挙行された［**図20**］。

モニュメントを祝賀するキルヒャーの著作『エジプトのオベリスク』、正式のタイトル『教皇アレクサンデル猊下に献じられた、最近、ローマのイシスの聖域の廃墟の中から発掘された、エジプトのオベリスクのヒエログリフの解釈』（*Ad Alexandrum VII. Pont. Max. Obelisci*

Aegyptiaci nuper inter Isaei Romani rudera effossi interpretatio hieroglyphica）［**図21**］は、1666年に教皇に捧げられて刊行されていた。他方、アレクサンデル７世自身は、1667年５月22日に没してしまい、建立式には列席することはできなかった。

その扉絵［**図22**］では、上方に花環で囲まれたアレクサンデル７世の肖像が二人の天使によって支えられており、中央では二人の天使が小オベリスクを抱えて空中に浮遊している。それに巻き付けられた細い紙には、「エジプトのオベリスク、アタナシウス・キルヒャー」の文字が記されている。地上には前方右に朽ちかけたピラミッド、後方にはひときわ高いオベリスクが見てとれる。次のページには、象を正面から見た銅版画［**図23**］が掲載されているが、上述した素描と同様に鼻を左側に上げており、顔向きが完成作とは異なっている。

オベリスクを載せた象についての解釈をめぐっては、二箇所に記された銘記が重要な鍵となり、おそらくその内容はキルヒャーが案出したもので、教皇の了解を得ていたと考えられる。まず、西側の広場を向いた台座［**図24**］には以下のように記されている。

> 主の1664年に、アレクサンデル７世は、神的な知恵に対して、古のオベリスクを、地下から掘り出され、かつてはミネルヴァの広場にあり、現在は神の母なる処女の広場に建てられたエジプトのパラスの記念碑を奉献した[70]。

この銘記においては、オベリスクが建立された場所に関して、エジプトのパラスであるイシスから、ギリシア・ローマの知恵の女神（パラス／ミネルヴァ）を介して、ロゴスの母であるマリアへの展開が確証されている。これはまさに、上述した、キルヒャーの「古代神学」の構想と合致するものである。

次に、東側の聖堂を向いた台座［**図25**］には次のように記されている。

> 動物の中で最強の象によって運ばれる、オベリスクに刻まれた、エジプトの知恵の形象を見る者は、強い精神は堅固な知恵を保持するという教えを理解しなさい[71]。

この銘記によれば、このオベリスクはいわばエジプトの知恵を象徴し、オベリスクの表面にはその内容がヒエログリフによって記されていると解釈できるだろう。そして、このエジプトの「堅固な知恵」を支えている「強い精神」を、「動物の中で最強の象」は寓意的に表現しているのである。

6. オベリスクに刻まれた「神的知恵」

サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ広場の中央で、オベリスクを支えている、頭を右側にかしげ、長い鼻を揺する象について、ウィリアム・ヘクシャーはさらに踏み込んだ解釈を試みている[72]。彼はまず、知恵の象徴であるオベリスクをまた、太陽の象徴と考える。そして、ロー

マの作家アイリアノス（Aelianus, 175頃-235頃）の『動物の本性について』（*De natura animalium*）における、「象は、太陽の光線に対して、手をかざすように鼻を上げて、昇る太陽に挨拶を送る、それゆえに象は神に愛される」（第７巻44章）という文章を参照する。そして、ヘクシャーによるならば、ミネルヴァ広場の象が示している、オベリスクを装飾するキージ家の紋章への挨拶の身振りは、太陽のオベリスクにおいて、「太陽」としての、あるいは「知恵の太陽」として教皇への挨拶なのである。

他方、イヴェルセンはヘクシャーの推測を基本的に受け容れながらも、また別様の解釈を提示している[73]。彼が参照するのは、先に紹介してホラポッロの『ヒエログリフ集』である。イヴェルセンはこの著作の幾つかの版が、アレクサンデル７世の図書室に収蔵されていたことに触れたのちに、『ヒエログリフ集』の第２巻第48番のヒエログリフを引いている。彼はギリシア語原文を引用せずに英訳のみで紹介しているが、原文からの訳は以下の通りである。

> ［強く、そして有益なものの臭いを感じとる人間］
> 彼ら［エジプト人］が、強く、そして有益なものの臭いを感じとる人間を表そうとするときには、鼻をもつ象を描く。というのは、象は鼻によって臭いを感じとり、出会ったものを捉えるからである[74]。

さらにイヴェルセンは、『ヒエログリフ集』のジャン・メルシエ（Jean Mercier, 1550頃-1570）によるラテン語訳を採りあげる。メルシエ、ラテン名ヨハンネス・メルケルス（Johannes Mercerus）は、1546年以来、フランス王立学院のヘブライ語教授を務めた碩学で、彼による優れた註解が施された『ヒエログリフ集』は、1548年にパリで刊行されると好評をもって迎え入れられた。３年後に再版をしたのち、幾つもの版が刊行され、その中でも1551年、1597年、1599年、1606年版には、ギリシア語版には見られない７つのヒエログリフが含まれている。イヴェルセンによれば「いくらか洗練された」ラテン語訳は以下のとおりである。

> 強く、有益なものについて勘が働く人間。
> 彼ら［エジプト人］は、能力と才知によって、有益なものを見分けることができる者を表そうとするとき、鼻をもつ象を描く。というのは、鼻は臭いを感じとり、状況を把握するからである[75]。

ここでイヴェルセンが注目するのはギリシア語の ἰσχυρός という言葉のラテン語訳である。ἰσχυρός は「強い」を意味する形容詞であり、それは fortis とラテン語訳に訳されるのが一般的であり、実際に、『ヒエログリフ集』のメルシエ以前の、ベルナルディヌス・トレバティウス（Bernardinus Trebatius）[76]のラテン語訳（1515年）、またフィリップス・ファシアニウス（Philippus Phasianius）のラテン語訳（1517年）でも fortis と訳されている。それをメルシエは robustus とラテン語訳しており、イヴェルセンは、オベリスクの台座の銘記に見られた、「強

い精神」（ROBUSTA MENS）という表現との一致に注目する。そして彼が提示する解釈は、ミネルヴァ広場の象の身振りは、オベリスクが示している神的知恵へと至るために、注意深く、そして敬虔に進み行くことを示している、というものである。

筆者にはヘクシャーよりもイヴェルセンの解釈の方が妥当だと思われる。というのも、キルヒャーの視線は、いかに優れていようとも、地上の「代理人」よりも、天上の、古代に源を発する「叡智」に向けられていたはずだからである。そして、さらに付言するならば、キルヒャーの念頭には、『ヒエログリフ集』の記述だけではなく、当時の寓意的人物像のハンドブックであった、チェーザレ・リーパ（Cesare Ripa, 1560頃-1645年頃）の『イコノロジーア』（*Iconologia*）の記述も浮かんでいたかもしれない。この著作は1593年にローマで初版が現れ、16世紀に入るとさまざまな版によって陸続と刊行された。その「力強さ」（Forza）の項目には次のように記されている。

> 強い（robusta）女性。彼女の頭には牡牛の角がついており、その傍らには、鼻をまっすぐに伸ばした一頭の象がいる。というのは、エジプト人たちは強い（forte）人間を表そうとするとき、この動物によってそれを示したからである。そのことは、エジプトのオロ［ホラポッロ］の『ヒエログリフ集』（*Ieroglifici*）第２巻で読まれるとおりである[77]。

それでは象の鼻が指し示している、オベリスクに刻まれた「エジプトの知恵の形象」（台座の言葉）を、キルヒャーはいかに読み解いているのだろうか。上述したように、キルヒャーのヒエログリフの読み方は、ホラポッロの『ヒエログリフ集』、フランチェスコ・コロンナの『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』、あるいはピエリオ・ヴァレリアーノの『ヒエログリフ集』とは異なるものであった。これらの著者は、ヒエログリフの一文字が一つの概念を表示すると考え、文字列を読み解く時には、それらの概念を連結させて文章を作成した。他方、キルヒャーにとっては、ヒエログリフはアルファベットとまったく異なる象徴的なものであり、「理念的な概念に属しているがゆえに、理念的な読みを通して」[78]、彼は首尾一貫した解釈を示すラテン語訳を与えるのである。

サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ広場のオベリスクは、四つの面のすべてにヒエログリフが刻まれている［**図26**］。このオベリスクは、元来はエジプト第26王朝第４代のファラオ、ハイアブラーがサイスに、紀元前588年から569年の間に建てたものであった。その北側の面に記されたヒエログリフは、オラツィオ・マルッキの解釈に拠るならば、「二つの国を栄えさせる輝く黄金。太陽とそれを愛する側室の息子。ネイトのハイアブラー、蜜蜂の里の、愛される下エジプトの。永遠の太陽のような、生の賦与者」[79]である。

このように、ヒエログリフの文意はハイアブラー王の称讃なのであるが、キルヒャーによる「理念的な読み」では以下のように解釈される［**図27**］。

> 至上の神にして原型であるヘンフタは、その力と贈り物を、星辰界の魂、すなわち、それ

に服従する太陽神に注ぎこみ、それゆえ、物質界、すなわち元素界の中に生命の運動が生じ、そして万物の豊穣さと種類の多様さが生じる。ある驚くべき共感によって惹きつけられた、二重の支配によって自らに従わせる権能が不断に流れ込む、オシリスのクラテール［混酒器］の豊かさから、絶えず見守っているケノシリスが —— 聖なる水路の、すなわち万物の生命が成り立つ源である湿潤な自然の保護者が —— 生じる。アガトダイモン［善きダイモン］であるオピオーンの庇護を獲得し、そして生命を拡大するために、この聖なる石板が彼に奉納された。その恩恵と神的なオシリスの湿潤なアガトダイモンの助力によって、天上のヘプタピュルゴン、すなわち諸惑星の要塞は、あらゆる厄災から保護されている。さらに、供犠と祭礼において、この目的のために、同じ像が取り囲まれて［中央に］いなければならない。〈自然〉の左手、あるいはヘカテーの泉、あるいは変転、すなわち、供犠の間に開示される自然の流出がある。それに引き寄せられたダイモンのポリュモルポスは、諸事物の豊かな多様性を、四つの部分から成る世界に与えている。テュポーンの策略の陰謀は排除され、それゆえ、諸事物の生は無傷のままに維持されるだろう。そのことのために、以下の五芒星、あるいは護符は、それらが基礎づけられる神秘的な根拠のゆえに、きわめて有益である。すなわち、それらは生のあらゆる善きものを獲得するための、誘因の力なのである[80]。

われわれは、ここでアタナシウス・キルヒャーによる、このヒエログリフの「理念的な読み」について詳述する余裕はないが、ひとまず、このような解釈を前にして、次のように述べることができるだろう。すなわち、キルヒャーに対して最後のヘルメス主義者だった、という指摘することは正確ではなく、むしろ、彼自身がヘルメス・トリスメギストスの「再生」だった、と評するべきなのである[81]。

註

1 *Vita Admodum Reverendi P. Athanasii Kirchieri, Societ. Jesu Viri toto orbe cele bratissimi*, in *Athanasius Kircher, Fasciculus Epistolarum*, ed. Hieronymus Langenmantel, Augusta Venedlicorum: Typis Utzshuneiderianis, 1684, p.36. Cf. Giunia Totaro, *L'autobiographie d'Athanasius Kircher: L'écriture d'un jésuite entre vérité et invention au seuil de l'oeuvre. Introduction et traduction française et italienne*, Bern: Peter Lang, 2009, pp.193, 244-245, 300; Daniel Stolzenberg, "Kircher's Egypt," in *The Great Art of Knowing: The Baroque Encyclopedia of Athanasius Kircher*, ed. by Daniel Stolzenberg, Stanford: Stanford University Libraries, 2001, p.115; John Edward Fletcher, *A Study of the Life and Works of Athanasius Kircher, 'Germanus Incredeibilis' with s Selection of his Unpublished Correspondence and an Annotated Translation of his Autobiography*, ed. by Elizabeth Fletcher, Leiden-Boston: Brill, 2011, p.483.

2　ローマに移入されたオベリスクの歴史については以下を参照。Erik Iversen, *The Myth of Egypt and Its Hieroglyphs in European Tradition*, Copenhagen: GAD, 1961 (With a New Preface, Princeton: Princeton University Press, 1993); Cesare D'Onofrio, *Obelischi di Roma*, Roma: Bulzoni , 1965; Erik Iversen, *Obelisks in Exile*, vol.1: *The Obelisks of Rome,* Copenhagen: GAD, 1968; Giovanni Cipriani, *Gli obelischi egizi: Politica e cultura nella Roma barocca*, Firenze: Olschki, 1993; Cristina Zadro, *Gli obelischi di Roma. Dalle sabbie dell'antico Egitto alle piazze della città eterna, dagli imponenti monoliti eretti dai faraoni alle imitazioni successive: Un viaggio nella storia e nei segreti dei monumenti simbolo del potere*, Roma: Newton Compton, 2007; Brian A. Curran, Anthony Grafton, Pamela O. Long and Benjamin Weiss, *Obelisk: A History*, Cambridge, Mass.: Burndy Library, 2009.

3　Roma: Domenico Basa, 1590. Cf. Domenico Fontana, *Della trasportatione dell'obelisco vaticano, 1590*, ed. Adriano Carugo, Con una introduzione di Paolo Portoghesi, Ristampa della prima edizione del Libro primo insieme con il rarissimo Libro secondo (1604), Milano: Il Polifilo, 1978; *Della Trasportatione dell'Obelisco Vaticano [On the Transportation of the Vatican Obelisk]*, Facsimile of 1590 edition on CD-ROM, Introduction by Ingrid D. Rowland, English Translation by David Sullivan,Rome: Domenico Basa – Oakland, Ca.: Octavo, 2002.

4　シクストゥス５世とオベリスクについては以下を参照。J.A.F. Orbaan, *Sixtine Rome*, London: Constable and Co., 1910, pp.130-172; Iversen, *Obelisks in Exile*, pp.28-44; D'Onofrio, *Gli obelischi di Roma*, pp.143-267; Cipriani, *Gli obelischi egizi,* pp.9-75; Jeffrey Collins, "Obelisks as Artifacts in Early Modern Rome: Collecting the Ultimate Antiques," *Richerche di Storia dell'arte*, 72 (2001), pp.49-68.

5　Brian Curran, *The Egyptian Renaissance: The Afterlife of Ancient Egypt in Early Modern Italy*, Chicago – London: The University of Chicago Press, 2007, p.281.

6　Roma: Domenico Basa. Cf. Michele Mercati, *Gli obelischi di Roma*, a cura di Gianfranco Cantelli, Bologna: Cappelli Editore, 1981. メルカーティについては以下を参照。Ibid., pp9-32; Iversen, *Myth of Egypt*, pp.84-85; Paula Findlen, *Possessing Nature: Museums, Collecting, and Scientific Culture in Early Modern Italy*, Berkeley – Los Angeles: University of California of Press, 1994, pp.233-235, 350-361［ポーラ・フィンドレン『自然の占有 ―― ミュージアム、蒐集、そして初期近代イタリアの科学文化』、伊藤博明・石井朗訳、2005年、ありな書房］; Curran *et all., Obelisk*, pp.154-155.

7　Iversen, *Obelisks in Exile*, p.85; Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher: A Renaissance Man and the Quest for Lost Knowledge*, London: Thames & Hudson, 1979, p.56; Stolzenberg, "Kircher's Egypt," p.115; Idem, *Egyptian Oedipus: Athanasius Kircher and the Secrets of Antiquity*, Chicago – London: The University of Chicago Press, 2013, p.11. Cf. Fletcher, *A Study of the Life and Works of Athanasius Kircher*, p.515.

8　Cf. Iversen, *The Myth of Egypt*, pp.86-87; Curran *et all., Obelisk*, p.163; Helen Whitehouse, "Towards a Kind of Egyptology: The Graphic Documentation of Ancient Egypt, 1587-1666," in *Documentary Culture: Florence and Rome from Grand-Duke Ferdinand I to Pope Alexander VII*, ed. by Elizabeth Cropper, Giovanni Perini and Francesco Solinas, Bologna: Nuova Alfa, 1992, pp.72-73.

9　「イシスのテーブル」について以下を参照。Ernesto Scamuzzi, *La Mensa Isiaca del Regio Museo di Antichità di Torino*, Roma: G. Bardi Editore, 1939; Enrica Leospo, *La Mensa Isiaco di Torino*, Leiden: Brill, 1978; P.Derchain, "Über die Turiner 'Mensa Isiaca.' Ein Deutungsversuch," in *Das Römisch-Byzantinische Ägypten*, Mainz am Rhein Philipp von Zabern, 1983, pp.61-66; Whitehouse, "Towards a Kind of Egyptology," pp.69-71; Curran, *The Egyptian Renaissance*, pp.231-234.

10 Cf. Stolzenberg, *Egyptian Oedipus*, p.120.

11 Kircher, *Obeliscus Pamphilus, hoc est, interpretatio nova & hucusque intetntatta obelisci hieroglyphici quem non ita pridem ex veteri hippodromo Antonini Caracallae Caesaris, in Agonale Forum transtulit, integritati restituit & in urbis aeternae ornamentum erexit Innocentius X Pont. Max...* Roma, 1650, Lib.2, Cap.2, p.93.

12 Ibid., Lib.1, Cap.4, p.46.

13 Kircher, *Oedipus Aegyptiacus: Hoc est, Universalis hieroglyphicae veterum doctrinae temporum iniuria abolitae instauratio...* Roma, 1652-54, *Anacephaleaeosis totius operis*, Cap.1, Arg.4, tom.3, p.568.

14 「古代神学」については以下を参照。Charles B. Schmitt, "Prisca Theologia e Philosophia perennis: Due temi del Rinasimento italiano e la loro fortuna," in *Il pensiero del Rinascimento italiano e il tempo nostro*, a cura di G. Tarugi, Firenze: Olschki 1970, pp.211-236; Eugenio Garin, *Il ritorno dei filosofi antichi*, Napoli: Bibliopolis, 1983; D.P. Walker, *Ancient Theology: Studies in Christian Platonism from the Fifteenth Century to Eighteenth Century,* Ithaca, N.Y.: Cornel University Press, 1972［D・P・ウォーカー『古代神学 ―― 15-16世紀のキリスト教的プラトン主義研究』、榎本武文訳、平凡社、1994年］; Francis A. Yates, *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*, Chicago – London: University of Chicago Press, 1964［フランセス・イエイツ『ジョルダーノ・ブルーノとヘルメス教の伝統』、前野佳彦訳、工作舎、2010年］; Brian P. Copenhaver and Charles B. Schmitt, *Renaissance Philosophy*, Oxford: Oxford University Press, 1992, pp.134-164［チャールズ・B・シュミット、ブライアン・P・コーペンヘイヴァー『ルネサンス哲学』、榎本武文訳、平凡社、2003年; Michael J.B. Allen, *Synoptic Art: Marsilio Ficino on the History of Platonic Interpretation*, Firenze: Olschki, 1998, pp.1-49; Martin Mulsow, "Ambiguities of the *Prisca Sapientia* in Late Renaissance Humanism," *Journal of the History of Ideas*, 65 (2004), pp.1-13. 以下の拙論の該当箇所も参照されたい。伊藤博明『ルネサンスの神秘思想』、講談社学術文庫、2012年。

15 Marsilio Ficino, *Argumentum in librum Mercurii Trismegisti*, in *Opera omnia*, Basileae, 1576 [Torino: Bottega d'Erasmo,1959-1962; Paris: Phénix, 2000], p.1836.

16 Ficino, *Theologia platonica de immortalitate animorum*, Praefatio, in Marsile Ficin, *Théologie platonicienne de l'immoralité des âmes*, ed. par Raymond Marcel, 3 voll., Paris: Les Belles Lettres, 1964-1977, tom.1, p.36; *Platonic Theology*, vol.1, ed. by James Hankins, and trans. by Michael J.B. Allen, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2001, p.10.

17 Ficino, *De religione christiana*, Praefatio, in *Opera omnia*, Cap.12, p.18.

18 Ibid., Cap.22, p.25.

19 Giovanni Pico della Mirandora, Conclusiones Cabalistae secundum opinionem propriam, n.10, in Stephen A. Farmer, *Syncretism in the West: Pico's 900 Theses (1486) : The Evolution of Traditional Religious and Philosophical Systems : With a Revised Text, English Translation, and Commentary*, Tempe, Ariz.: Medieval & Renaissance Texts & Studies, 1998, p.525.

20 Kircher, *Oedipus Aegyptiacus*, Classis III, tom. 2, pp.123 sqq.

21 Ibid., pp.186 sqq.

22 Ibid., pp.209 sqq.

23 Kircher, *Oedipus Aegyptiacus*, Classis XII, tom.2-2, pp.498 sqq.

24 Ibid. pp.498-499.

25 Cf. Ficino, *Argumentum in librum Mercurii Trismegisti, in Opera omnia*, Basileae, p.1836.

26 Kircher, *Obeliscus Pamphilus*, Lib.2, Cap.4, p.113. Cf. Stolzenberg, *Egyptian Oedipus*, pp.138-140.

27　ヨーロッパにおけるヒエログリフの伝統については以下を参照。Iversen, *The Myth of Egypt and its Hieroglyphs in European Tradition*; Liselotte Dieckmann, *Hieroglyphics: The History of a Literary Symbol*, St. Louis, Miss.: Washington University Press, 1970. 以下の拙論の第１章「ヒエログリフ」も参照されたい（本論考の記述が一部重複している点をお許し願いたい）。伊藤博明『綺想の表象学 ―― エンブレムへの招待』、ありな書房、2007年。

28　2,36:2,125. ヘロドトス『歴史』、松平千秋訳、岩波文庫、2007年、（上）184ページ、242ページ。

29　3, 4. In Diodrus Siculus, *Bibliothèque historique*, Livre III, ed. Bibane Bommelaer,Paris: Les Belles Lettres, 1989, p.6.

30　36.14. In Pliny, *Natural History*, ed. D. E. Eicholz, vol.10, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1962, p.51.

31　17, 4. In Ammien Marcellin. *Histoire*, Tome II: Livres XVII- XIX, ed. Guy Sabbah, Paris: Les Belles Lettres, 1970, p.47.

32　以下を参照。『プロティノス全集』、第３巻、田中美知太郎・水地宗明・田之頭安彦訳、中央公論社、1987年、537-538ページ。

33　ルネサンスにおけるヒエログリフについては以下を参照。Iversen, *The Myth of Egypt and its Hieroglyphs in European Tradition*; Karl Giehlow, “Die Hieroglyphenkunde des Humanismus in der Allegorie der Renaissance,” *Jahrbuch der Kunsthistorisches Sammlungen des Allerhöchsten Kaiserhouses*, 32 (1915), pp.1-229; Patrizia Castelli, *I geoglifici e il mito dell’Egitto nel Rinascimento*, Firenze: Edam, 1979; Ludwig Volkmann, *Bilderschriften der Renaissance. Hieroglyphik und Emblematik in ihren Beziehungen und Fortwirkungen*, Leipzig: Hiersemann, 1922; Rudolf Wittkower, “Hieroglyhphs in the Early Renaissance,” in Idem, *Allegory and the Migration of Symbols*, London: Thames and Hudson, 1977, pp.114-128［ウィトカウワー『アレゴリーとシンボル ―― 図像の東西交渉史』、大野芳材・西野嘉章訳、平凡社、1991年］.

34　*Hori Apollinis Hieroglyphica*, 1,2, ed. Francesco Sbordone, Napoli: Leffredo, 1940, pp.4-5.『ヒエログリフ集』の校訂版はこのズボルドーネ版が基本である。多少の改訂を含むその後の版としては以下がある。*Des Niloten Horapollon Hieroglyphienbuch*, 1 Text und Übersetzung, Herausgegeben und übersetzt von Heinz Josef Thissen, München – Leipzig: Suer, 2001; Horapollo L’Eziziano, *Trattato sui geroglifici*, Testo, traduzione e comment a cura di Franco Crevatin e Gennaro Tedeschi, Napoli: Università degli studi di Napoli “L’orientale”, 2002. 本書については以下を参照。*The Hieroglyphica of Horapollo (1505)*, Translation by George Boas, New York: Pantheon, 1950; Sandra Sider, “Horpollo,” in *Catalogus Traslationum et Commentariorum*, vol.6, ed. F. Edwards Granz, Virginia Brown, and Paul Oskar Kristeller, Washignotn, D.C.: The Catholic University of America Press, 1986, pp.15-29; Denis Drysdall, “The Hieroglyphs at Bologna,” *Emblematica*, 2 (1987), pp.225-247; Idem, “A Note on the Relationship of the Latin and Vernacular Translation of Horapollo from Fasanini to Caussin,” *Emblematica*, 4 (1989), pp.225-241.

35　Alberti, *De re aedificatoria*, 8, 4, ed. G. Orlandi,Milano: Il Polifilo, 1966, p.697.

36　HYPNEROTOMACHIA POLIPHILI, VBI HV/MANA OMNIA NON NISI SOMNIVM / ESSE DOCET, ATQVE OBITER / PLVRIMA SCITV SANE / QVAM DIGNA COM/MEMORA, Venetiis Mense decembri MID in aedibus Aldi Manutii. 標準的テクストは以下の通り。*Hypnerotomachia Poliphili*, edizione critica e commento a cura di Giovanni Pozzi e Lucia A. Ciapponi, 2 voll., Padova: Antenore, 1968, 2a ed., 1980; *Hypnerotomachia Poliphili*, a cura di Marco Ariani e Mino Gabriele, 2 voll, Milano: Alelphi, 1998. 本書については以下を参照。M. Teresa Casella e Giovanni Pozzi, *Francesco Colonna. Biografia e opere*, Padova: Antenore, 1959；Maurizio Calvesi, *Il Sogno di*

Polifilo prenestino, Roma: Officina Edizioni, 1980; Idem, *La "Pugna d'amore in sogno" di Francesco Colonna romano*, Roma: Lithos, 1996; Giovanni Pozzi, "Premessa alla ristampa", in *Hypnerotmachia Poliphili*, a cura di Pozzi e Ciapponi, vol.2, 2a ed., pp.1*-24*; Idem, "Ancora il Polifilo: l'autore, le vignette," in Idem, *Sull'orlo del visible parlare*, Milano: Adelpi, 1993, pp.115-143; Brian A. Curran, "The Hypneromachia Poliphili and Renaissance Egyptology," *Word & Image*, 14, 1/2 (January-June, 1998), pp.156-185; Curran, *The Egyptian Renaissance*, pp.133-158. 以下の拙論も参照されたい。伊藤博明「フランチェスコ・コロンナ『ヒュプネロトマキア・ポリフィリの世界』、松田隆美・徳永聡子編『世界を読み解く一冊の本』、慶應大学出版会、2014年、131-189ページ。

37 ed.Venezia, 1499, fol. b 6v; ed. Pozzi e Ciappponi, p.29.

38 Cf. *Hypnerotomachia Poliphili*, a cura di Ariani e Gabriele, vol.2, p.596.

39 ed.Venezia, 1499, fol. b 8v; ed.Pozzi e Ciappponi, p.33.

40 Cf. Calvesi, *Il sogno di Polifilo prenestino*, p.137.

41 Desiderius Erasmus, *Opera omnia*, ed. J. Leclerc, 10 voll, Leiden, 1703-1706, vol.2, 399E-400D. Cf. Margaret Mann Phillips, *The Adages of Erasmus. A Study with Translations*, Cambridge: Cambridge University Press, 1964, pp.171-190.

42 以下の拙稿を参照されたい。「ラブレーとヒエログリフ ――『ガルガンチュワ物語』第９章」、『西洋中世における言語哲学の起源と展開』、平成12年度科学研究費補助金［基盤研究（A）(1)］研究成果報告書、研究代表者・清水哲郎（東北大学大学院文学研究科教授）、2001年３月、129-148ページ。

43 ヴァレリアーノについては以下を参照。Curran, *The Egyptian Renaissance,* pp.227-231; Julia Haig Gaisser, *Pierio Valeriano on the III Fortune of Learned Man: A Renaissance Humanist and his World*, Ann Abor: The University of Michigan Press, 1999; Bernard Dorval, "Philippe de Champaige et les Hiéroglyphique de Pierius," *Revue de l'art*, 14 (1971), pp.31-41.

44 柳沼重鋼訳、岩波文庫、1996年、65ページ。

45 Pierio Valeriano, *Hieroglyphica*, vol.31, Basel, 1556, p.311.

46 Ficino, *Argumentum in librum Mercurii Trismegisti*, in *Opera omnia*, p.1836.

47 Ficino, *Commentaria in Philebum Platonis de summo bono*, 1, 29, in *The Philebus Commentary*, edited and translated by Michael J.B. Allen, Berkely: University of California Press, 1975, p.271

48 Ficino, *In Plotini Epitomae, seu Aergumentua, Commentaria et Annotationes*, in *Opera omnia*, p.1768.

49 キルヒャーのヒエログリフについては以下を参照。Stolzenberg, *Egyptian Oedipus*, pp.198-225; Don Cameron Allen, *Mysteriously Meant: The Rediscovery of Pagan Symbolism and Allegorical Interpretation in the Renaissance*, Baltimore: Johns Hopkins Universtiy, 1970, pp.120-133; Dino Pastine, *La nascita dell'idolatoria: L'Oriente religioso di Athanasius Kircher*, Firenze: La Nuova Italia, 1978, ch.3; Valerio Rivosecchi, *Esotismo in Roma barocca: Studi sul Padre Kircher*, Roma: Bulzoni, 1982, ch.1; Gerhard Strasser, "La contribution d'Athanasius Kircher à la tradition humanste hiéroglyphique," *XVIIe Siècle*, 40 (1988), pp.72-92; Idem, "Das Sprachdenken Athanasius Kirchers," in *The Language of Adam*, ed. By Allison Coudert, Wiesbaden: Harrassowitz, 1999, pp.151-169; Sergio Donadoni, "I geroglifici di Athanasius Kircher," in *Athanasius Kircher: Il museo del mondo*, a cura di Eugenio Lo Sardo, Roma: De Luca, 2001, pp.101-110; Caterina Marrone, *I geroglifici fantastici di Athanasius Kircher*, Veterbo: Nuovi Equilibri, 2002.

50 Kircher, *Obeliscus Aegyptiacus*, p.16.

51 Kircher, *Obeliscus Pamphilius*, 5, 3, p.398.

52 Cf. D'Onofrio, *Obelischi di Roma,* pp.222-229; Iversen, *Obelisks in Exile*, pp.76-92; Ingrid

Rowland, " 'Th' United Sense of the Universe': Athanasius Kircher in Piazza Navona," *Memoirs of the American Academy in Rome*, 46 (2001), pp.154-181.

53 Orazio Marucchi, *Gli obelischi egiziani di Roma*, Roma: E. Loescher & co, 1898, p.128.

54 Ibid., p.129.

55 Kircher, *Obeliscus Pamphilius*, p.444.

56 Ibid., 5,3, p.399. Cf. Stolzenberg, *Egyptian Oedipus*, p.204.

57 Ibid., p.400.

58 このオベリスクについては以下を参照。D'Onofrio, *Obelischi di Roma*, pp.230-237; Iversen, *Obelisks in Exile*, pp.93-100; Domenico Gnoli, "Disegni del Bernini per l'Obelisco della Minerva," *Archivio Storico dell'Arte*, 2 (1888), pp.398-403; William S. Heckscher, "Bernini's Elephant and Obelisk," *Art Bulletin,* 29 (1947), pp.155-182.

59 D'Onofrio, *Obelischi di Roma*, Fig.134; Iversen, *Obelisks in Exile*, Fig.52; Gnoli, "Disegni del Bernini," Progetto, n.1.

60 D'Onofrio, *Obelischi di Roma*, Fig.136; Iversen, *Obelisks in Exile*, Fig.53; Gnoli, "Disegni del Bernini," Progetto, n.2.

61 D'Onofrio, *Obelischi di Roma,* Fig.136; Iversen, *Obelisks in Exile,* Fig.58; Gnoli, "Disegni del Bernini," Progetto, n.3.

62 D'Onofrio, *Obelischi di Roma*, Fig.127; Iversen, *Obelisks in Exile*, Fig.57; Gnoli, "Disegni del Bernini," Progetto, n.4.

63 D'Onofrio, *Obelischi di Roma*, Fig.127; Iversen, *Obelisks in Exile*, Fig.54; Gnoli, "Disegni del Bernini," Progetto, n.5.

64 D'Onofrio, *Obelischi di Roma*, Fig.127; Iversen, *Obelisks in Exile*, Fig.56.

65 ヨーロッパの文化史において「象」が有してきた寓意的・象徴的意味について資料を博捜して明らかにした上で、サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ広場のオベリスクを論じたのは上記のウィリアム・ヘクシャーの古典的論考である（Heckscher, "Bernini's Elephant and Obelisk"）。現在は以下も参照。Flaminia Cosmelli, "L'elefante, l'albero e l'obelisco," *Storia dell'arte*, pp.107-118.

66 Iversen, *Obelisks in Exile*, Fig.59. 現在はウィンザー城のコレクションとなっている。Cf. Heinrich Brauer und Rudolf Wittkower, *Die Zeichnungen des Gianlorenzo Bernini*, Berlin: Heinrich Keller, 1931, vol.2, no.14.

67 Iversen, *Obelisks in Exile*, Fig.60. 現在はフィレンツェのパラッツォ・コルシーニに所蔵されている。

68 *Le singolarità di Roma moderna ricercate, e spiegate da Francesco de' Ficoroni aggregato alla Reale Accademia di Francia,* 1744, Lib.2, Cap.5, p.35. これは同著者の以下の書物と合本で刊行され「第２巻」と呼ばれている。*Le Vestigia, e rarità di Roma antica ricercate, e spiegate da Francesco de' Ficoroni aggregato alla Reale Accademia di Francia.,* Roma, nella stamperia di Girolamo Mainardi, 1744. Cf. Iversen, *Obelisks in Exile*, p.96, note 7.

69 Biblioteca Vaticana, Stampi Chigi, 11, 610, fol. b vii r. Cf. Hekscher, "Bernini's Elephat and Obelisk," p.157, note 14.

70 "VETEREM OBELISCVM / PALLADIS AEGYPTIAE MONVMENTVM / E TELLVRE ERVTVM / ET IN MINERVAE OLIM / NVNC DEIPARAE GENITRIS / FORO ERECTVM / DIVINAE SAPIENTIAE / ALEXANDER VII DEDICAVIT / ANNO SAL. MDCLXVII." Cf. Iversen, *Obelisks in Exile*, p.97; Hekscher, "Bernini's Elephat and Obelisk," p.179.

71 "SAPIENTIS AEGYPTI / INSCVLPTAS OBELISCO FIGVRAS / AB ELEPHANTO /

BELLVARVM FORTISSIMA / GESTARI QVISQVIS HIC VIDES / DOCVMENTVM INTELLIGE / ROBVSTAE MENTIS ESSE / SOLIDAM SAPIENTIAM SVSTINERE." Cf. Iversen, *Obelisks in Exile*, p.98; Hekscher, "Bernini's Elephat and Obelisk," p.180.

72 Hekscher, "Bernini's Elephat and Obelisk," pp.177-182.

73 Cf. Iversen, *Obelisks in Exile*, pp.99-100.

74 "[πῶς ἄνθρωπον ἰσχυρόν, καὶ τῶν συμφερόντων ὀσφραντικόν] ἄνθρωπον ἰσχυρόν, καὶ τῶν συμφερόντων ὀσφραντικόν βουλόμενοι σημῆναι, ἐλέφαντα ζωγραφοῦσιν, ἔχοντα τὴν προβοσκίδα· ἐκεῖνος γὰρ ταύτῃ ὀσφραίνεται, καὶ κρατεῖ τῶν προσπιπτόντων." ed. Sbordone, p.192; hers. von Thissen, p.68; a cura di Crevatin e Tedeschi, p.131.

75 "Quo modo robustum hominem queaue e re sua sint subolfacientem: Eum qui simul & viribus & ingenio valeat, ad ea dignoscenda quae utilia sint, volentes significare, Elephatum pingunt cum sua proboscide. Hac enim odoratur, & incidentia conseauitur," cited by Iversen, *Obelisks in Exile*, p.99, note 2. Cf. Horapollo, *Zwei Bücher über die Hiereglyphen*, In der lateinischen Übersetzung von Jean Mercier nach der Ausgabe Paris 1548, Bearbeitet, mit einer deutschen Übersetzung versehen und kommentiert von Helge Weingärtner, Erlangen: SPECHT-Verlag, 2002, p.120.

76 イヴェルセン（Ibid., p.99, note 2）は、翻訳者を「フロベニウス」（Frobenius）としているが、彼は「序文」を著した者である。Cf. Sider, "Horapollo," p.20.

77 Cesare Ripa, *Iconologia, overo descritione di diverse imagini cavate dall' antichita, e di propria inventione*, Roma,1503, p.171; Cesare Ripa, *Iconologia*, a cura di Sonia Maffei, Testo stabilito da Paolo Procaccioli, Torino: Einaudi, 2012, pp.209-210.

78 Kircher, *Obeliscus Pamphilius*, p.398.

79 Marucchi, *Gli obelischi egiziani di Roma*, p.118.

80 Kircher, *Obeliscus Aegyptiacus*, p.78.

81 Cf. Ingrid Rowland, "Kircher Trismegisto," in *Athanasius Kircher: Il museo del mondo*, a cura di Eugenio Lo Sardo, Roma: De Luca, 2002, pp.113-121.



図1　1460年代のヴァティカンのオベリスク
ジョヴァンニ・マルカノーヴァ
『古代の遺物の集成』より

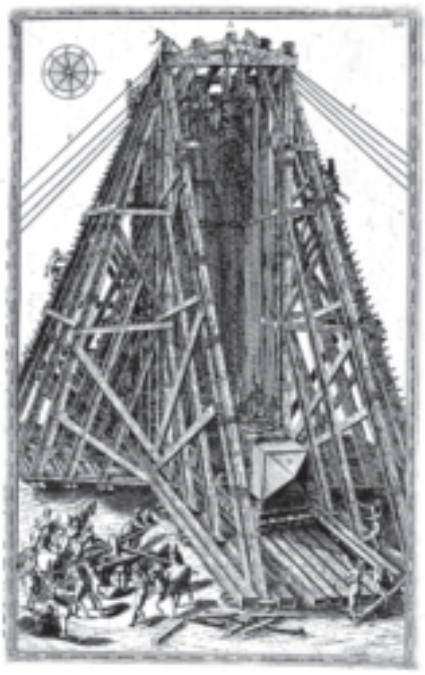


図2　ドメニコ・フォンターナ
『ヴァティカンのオベリスクの移動について』
ローマ、1590年　20r.



図3　ヘルヴァルト・ヴァン・ホーヘンブルク
『ヒエログリフ宝典』 fol.1.

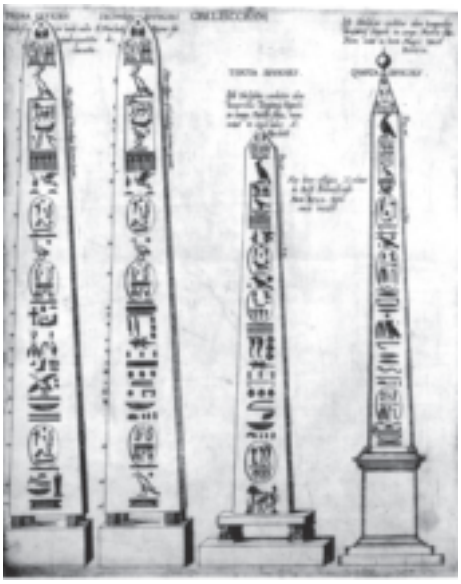


図4　ヘルヴァルト・ヴァン・ホーヘンブルク
『ヒエログリフ宝典』 fol.2.



図5　ヘルヴァルト・ヴァン・ホーヘンブルク
『ヒエログリフ宝典』 fol.3.



図6　ヘルヴァルト・ヴァン・ホーヘンブルク
『ヒエログリフ宝典』 fol.9.



図7　ウェスパシアヌス帝の神殿の遺物
81年



図8　ヘルヴァルト・ヴァン・ホーヘンブルク
『ヒエログリフ宝典』 fol.18.

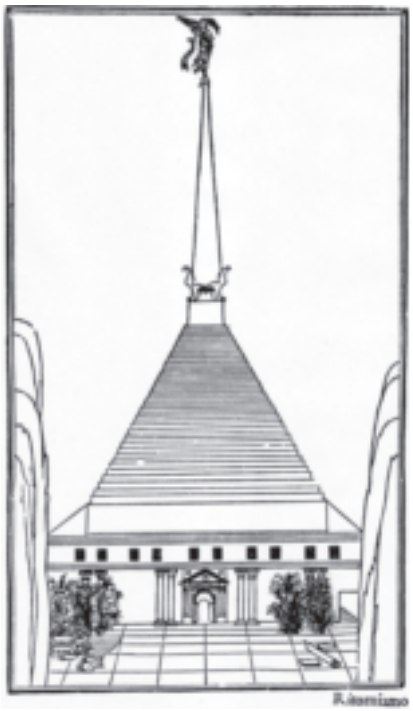


図9　フランチェスコ・コロンナ
『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』
ヴェネツィア、1499年　fol.b 1 v.

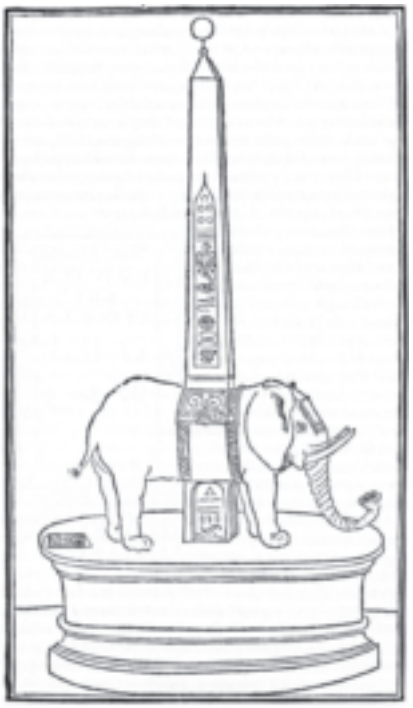


図10　フランチェスコ・コロンナ
『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』
ヴェネツィア、1499年　fol.b 7 v.



図11　フランチェスコ・コロンナ
『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』
ヴェネツィア、1499年　fol.b 7 r.

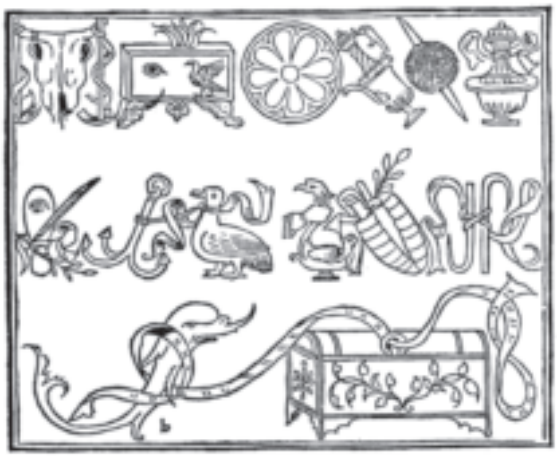


図12　フランチェスコ・コロンナ
『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』
ヴェネツィア、1499年　fol.b 1 r.



図13　ピエリオ・ヴァレリアーノ
『ヒエログリフ集』
バーゼル、1602年、311ページ。



図14　アタナシウス・キルヒャー
『パンフィーリのオベリスク』
ローマ、1650年　444ページ。

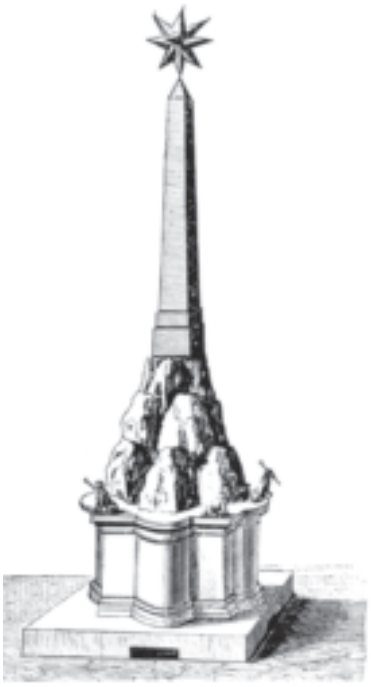


図15　ジュゼッペ・パッリア
「サンタ・マリア・ソプラ・ミネル
ヴァ広場のオベリスク案」



図16　ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ
「サンタ・マリア・ソプラ・ミネル
ヴァ広場のオベリスク案」



図17　ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ
「パラッツォ・バルベリーニのオベリスク案」

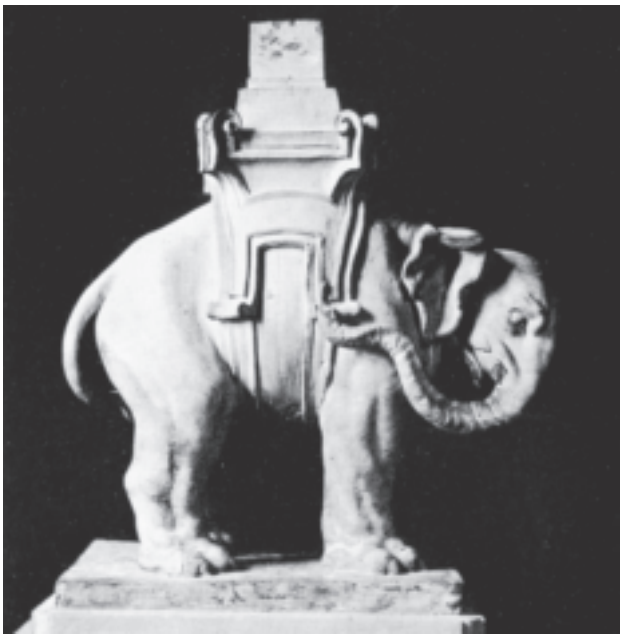


図18　ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ
「パラッツォ・バルベリーニのオベリスク案」



図19　ヘジャン・ロレンツォ・ベルニーニ
「サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ広場のオベリスク案」

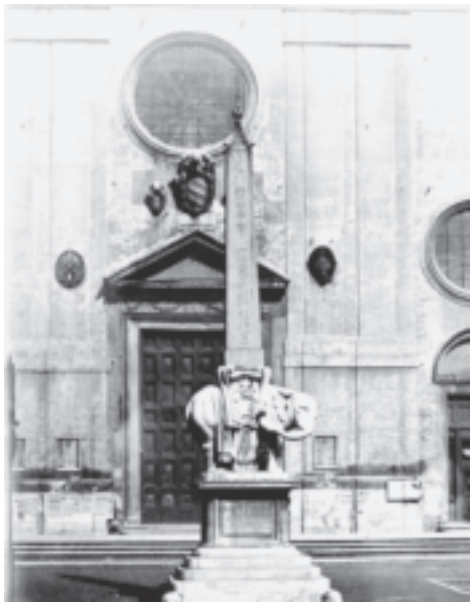


図20　ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ
《象のオベリスク》
ローマ、サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ広場、1667年



図21　アタナシウス・キルヒャー
『エジプトのオベリスク』
ローマ、1666年、タイトル・ページ



図22　アタナシウス・キルヒャー
『エジプトのオベリスク』
ローマ、1666年、扉絵



図23　アタナシウス・キルヒャー
『エジプトのオベリスク』
ローマ、1666年、挿絵



図24　ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ
《象のオベリスク》、台座（西面）



図25　ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ
《象のオベリスク》、台座（東面）



図26　象のオベリスク（４面）
アタナシウス・キルヒャー
『エジプトのオベリスク』より



図27　象のオベリスク（北面）
アタナシウス・キルヒャー
『エジプトのオベリスク』より
78ページ。